
乙女は白百合の箱庭に

赤眼鏡の白チョーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女は白百合の箱庭に

【Nコード】

N8249X

【作者名】

赤眼鏡の白チヨーク

【あらすじ】

「美弥ー大好き」「ありがとう」「…誰かあの二人どうにかしろ」とある女子校の、のほほん日常。ほんのり百合。完全作者趣味。のんびり更新していきます。よければお読みいただけたらと思います。

いち。

「ね、ね、美弥」

「何？」

「見てー我が校のアイドル、和葉さんと未羽さんだ」

「…」

「微笑ましいな〜麗しいな〜何話してるんだろう。ね、何話してると思う？」

「昼ご飯の話？」

「…や、うん。確かに弁当食べながら話してるけどさ…」

「智由、これさっきの授業をまとめといたノート」

「え！ありがとー！さっきから何書いてるのかと思ってた」

「四時限目、智由寝てたから」

「えーよくわかったね。ハゲ…じゃなくて森元先生にもばれなかったのに」

「涎でてたよ」

「…やだ恥ずかしい。お嫁に行けない」

「じゃあうちにおいで」

「…………美弥大好き！私美弥のお嫁になるー！」

「はいはい」

「美弥可愛いなあ〜」

「智由が一番可愛い」

「…もう、照れるじゃないか！」

「誰かあれどうにかしてよ」

「毎度のことながらあれが普通なのかどうかと思う」

「ああ…また美弥親衛隊がざわついている」

「…ここ女子校だよね」

に。

「美弥大変ー!!」

「智由、おはよう」

「あ、おはよう。じゃなくて!大変なの!」

「どうしたの」

「あのね、あのね。…私は見てしまったの」

「…」

「…」

「…」

「…何を、とか聞いて」

「何を」

「我が校のアイドル、和葉さんと未羽さんがね、中央ガーデンにいらっしたの」

「うん」

「お二人で朝早くからどうしたのかと思ったんだけど」

「おはよう愛里。今日の花当番だけど、昼時間私行くから」

「…むう…美ー弥ー」

「聞いてるよ。お二人がどうしたの」

「和葉さんが未羽さんの頬を触っててね…ネズミなの!」

「ネズミ?…チユーしてたってこと?」

「うん。いやー…びっくりしちゃった」

「そう」

「麗しかったな…憧れちゃうなあ」

「智由」

「ん?」

「ちゅっ」

「…」

「」

「」

「」

「えっ…ええええ！」

「先生来る前に英語の予習確認しよう」

「あ、う、うん。うん」

「智由、それ数学のノートだよ」

「…あれか。でこチューだから許されるのか」

「ここ教室なんだけどね」

「あれは美弥的な嫉妬なんじゃないか？」

「あの二人早くくつつけばいいのにね」

さん。

「美弥：私もうダメかも知れない」

「どうしたの」

「最近和葉さんと未羽さん観察日記してて、すっかり忘れてたけど
…もうすぐテストだよー！」

「正確には来週ね」

「美弥：どうしよう。赤点なんかとったら美弥と同じ白鳳寺なんか
行けーなーいー」

「…頭振ったら髪乱れるよ」

「…直して」

「はいはい」

「あーあ…やだなあ」

「智由」

「ん？」

「智由には私がついてる」

「お？」

「赤点になんかせせないよ」

「おお！さすが美弥！」

「赤点とつたら二週間私のお菓子禁止ね」

「…え？」

「だからお茶会もなし」

「み、美弥！それじゃ私生きていけないよ！美弥のお菓子がないな
んて…っ！」

「じゃあ頑張ろう？」

「うん！」

「さあ、今回の範囲の苦手分野の確認からしよっか」

「手玉にとるってこういうことを言っただね」

「笑顔の美弥って怖い…」

「美弥のお菓子おそるべし」

「智由が単純過ぎるだけだろ」

よん。

「トリックオアトリート！」

「はい」

「むぐっ…もぐもぐ…」

「…」

「…ごっくん」

「…」

「トリックオアトリート！」

「はい」

「むぐっ…ちょ、美弥どんだけお菓子持ってきてるの？」

「智由がそういつてくると思ったから」

「むむむむ…悔しい…」

「あ、智由」

「なあに？」

「トリックオアトリート」

「…え？」

「お菓子をくれないと悪戯するよ」

「あ、え、ちょちよっと待った！」

「待ったなし」

「美弥の馬鹿ー！どこ触ってるのー！」

「あれどこまでいくと思う」

「…あーあ…暴れすぎてパンツ見えてるよ」

「教室のドアから見てる親衛隊こわ…」

「ここ女子校だよね」

」。

「あれ、美弥親衛隊さんだ！おはよう」

「智由様、おはようございます」

「様付けなんかなくなっていいのに」

「いいえ、そういうわけにはいきません」

「あ、美弥ならハゲ……じゃなくて森元先生に呼ばれて職員室だけど
把握しております。今日は美弥様に用があるわけではございませ
ん」

「そなの？」

「このような物で申し訳ないのですが、私が本日実習で作りました
菓子を持参しました」

「いい匂い……凄い美味しそう！」

「もしよろしければ、頂いていただけないでしょうか」

「いいの？」

「はい」

「わー、マフィンだ！私の好物だよ！」

「把握しております」

「今朝ごはん食べ忘れてお腹減ってたんだよね」

「把握しております」

「チョコとバナナどっちにしよう……悩むなあ……」

「どちらもどうぞ。美弥様用のも焼いてありますので」

「本当？私マフィンチョコとバナナが好きなんだよねー」

「把握しております」

「…………っ！」

「落ち着いて…！わかるけど、つつこみたい気持ちはわかるけど！
何でそんな細かいことまで知ってるのって思うけど！つつこんだ瞬間
にあんたの人生終わっちゃうから！」

「あれが親衛隊の情報の力なのかな」

「何でも知ってるんだね…」

ろく。

「よし、ネタキターっ！これでコミケに間に合う…！」

「愛里、さっきの授業中何書いてたのー？」

「……………」

「え、何で隠しちゃうの？」

「やだなあ、智由。誰にでも見られたくないものはあるでしょ？」

「…まさかラブレターとか！」

「授業中に恋文書く馬鹿がいるか！」

「えー違うの？じゃあ…交換日記とか？」

「や、違います」

「んむむ…じゃあ…」

「智由」

「美弥。どしたの？」

「赤坂先生に提出する、こないだのアンケート用紙でてないよ」

「…わあ、忘れてた。ありがと、美弥！出してくる！」

「……………」

「……………」

「……………」

「…な、何？美弥」

「コミケ頑張っつて」

「…っ！」

「ただ学校で年齢指定者の百合を書くときは、気をつけた方がいいよ」

「美弥何で知ってるの…！？」

「…ふっ」

「え、何そのすました笑いは何…」

「ちなみに智由のパンツはピンクって書いてたけど今日は水色だから」

「…直しておきます」

「革命！」

「ねえ、コミケって何？」

「知らないほうが良いこともあるってことだ。よし、8流し！」
「…負けた」

ばんがいへん。く長谷川と滝と鈴橋く

「…あ」

「何？」

「あー、いや。ほら、うちのクラスで有名な蓮川さん」

「ああ本当だ」

「あの話って本当なのかね」

「蓮川さんと八嶋さんが付き合ってるってやつ？」

「そうそう。珍しいことじゃないけどね」

「結構多いもんね」

「八嶋さんは親衛隊まであるし」

「おっはよー！」

「おはよ」

「何見てたの？…お、智由たん美弥たんじゃんか」

「あの二人って付き合ってるのかなーって話」

「付き合ってないよ」

「えっそうなの？」

「うん。智由たん鈍すぎて美弥たんからの愛に気づいてないと思う」

「詳しいね…」

「あ、付き合っで思い出した」

「何？」

「私恋人できた」

「「えー！？」」

「この学校の子なんだけど」

「い、いつの間に！」

「嘘お！？」

「近々紹介するわ。じゃねー」

「え、まっ…待ってー！」

「……本当に？」

なな。

「で、何でそんな話になったの」

「だって智由と美弥お似合いだもん」

「いける、いけるよ！」

「美弥智由か…新ネタ…」

「愛里、後で絞める」

「ご勘弁くださいいいい」

「いやいや、美弥はいいとしても私は無理無理ー」

「本人はそういつてるけど？」

「……和葉さんと末羽さんに話したら楽しみにしてるっていったけど」

「頑張りましょう！ね、美弥！」

「おお、単純」

「この組み合わせなら学祭優勝も夢じゃないね…！」

「目指せ学食無料券！」

「学食無料券目当てか」

「智由もああ言ってるし、美弥やるっしょ？」

「…まあ」

「………学祭ネタ」

「………愛里？」

「う、嘘ですうううう！」

「で、何やるの？」

「聞いてなかったの？」

「学祭のクラスの出し物」

「劇だよ」

「なんと、ロミオとジュリエットー！」

『...は？』

はち。

「智由、元気だしなつて」

「無理！和葉さんと末羽さんが見てる前でこけるなんて最悪ー！」

「あれは見事なこけっぷりだったよねー」

「でも美弥が咄嗟に抱き寄せたから大丈夫だったじゃん」

「まあ…そうなんだけど」

「一瞬二人の背後に薔薇が見えたわ…」

「え、何愛里？」

「いいえ、何でも！」

「智由、ここにいたの」

「美弥」

「一那が撮った写真くれるって」

「何その束！」

「本当？美弥の歌ってたこの写真ある？」

「もちろんです」

「…束の写真についてはツッコミなしなのね」

「愛里、気にしたら負けよ」

「おお！よく撮れてるね…この美弥とか凄いかっこいいー！」

「この智由可愛い」

「…それ、こけてるところだけど」

「智由は何でも可愛いよ」

「美…弥…」

「…バカップル」

「把握しております。お二人ですから」

「そいえば、学祭の写真が売りに出されてたわ」

「ああ…あれでしょ。34番の写真がやたら売れたっていう」

「34番？」

「……客席で手を繋ぐ和葉さんと未羽さんだよ」

きゅ。

「寒いー学校遠いー」

「結構雪積もったね」

「智由、手袋」

「あ、ありがと。でもこれかたっぽだけだよ？」

「ん」

「…握手？」

「手」

「はい。…わ、ありがと」

「手繋いでコートのポケットに入るとか、あんたらカップルか！」

「やだなあ、愛里。美弥ならもつと可愛い子の方がいいでしょ」

「そんなことないよ」

「…や、なんかもうご馳走様だわ」

「ご飯食べてないのに、愛里何言ってるの？」

「愛里は少しおバカだから」

「そっか！」

「納得するなよ！フォローしろ！」

「おはようございます」

「あ、隊長さんおはよう」

「おはようー那」

「…愛里様、手が冷えてます」

「え、あ、ああ…」

「私のでよければ手袋を」

「え、悪いよ、隊長さんの手袋だし」

「しかし…」

「一那、こうすればいいよ」

「そうそう、繋いでポケットに入れば寒くないよ」

「ニヤニヤ笑いながら言うなよ…っ！」

「…おお、衝撃的な図」

「ついに愛里も染まったか」

「でも相手が親衛隊隊長なのが意外だわ」

「……見てるこっちが恥ずかしくなるね」

ばんがいへん。ゝ鈴橋と田口ゝ

「お、愛里んどした？死んでる」

「…ああ、鈴か」

「珍しいね、机に俯せてるなんて。いつもガリガリ何か書いてるのに」

「あー、うん。まあ、そうなんだけど」

「コミケ間に合わなかったの？」

「いや、こないだ出した新刊はバカ売れして今増刷中よ……… ってか何でコミケを知ってるの!？」

「とある眼鏡さんからの情報デス！」

「美弥だろ」

「あれま、あんま驚かないんだね？」

「慣れたよ。慣れなくなかったけど慣れたよ！そりゃ半年一緒にいればそろそろわかってくるわ」

「おー流石、愛里。慣れたね」

「いや、むしろつつこむべきは美弥の情報力でしょ……」

「あ、じゃああの噂も本当？」

「噂？」

「愛里がこの学校に染まってきたっていう」

「この学校って……」

「ま、要約すると朝からまさかの親衛隊長とイチヤイチャし……ぶおっ」

「鈴、お口チャック」

「うおお」

「ってかも噂になってるのか…っ！」

「あーびっくりした。口掴まむのは反則でしょ」

「……………」

「あれ、おーい愛里さん？」

「……………」

「愛里は死んだように俯せた！」

「…もうつつこむ気力もないわよ」

「ええ、つまらないよ！つてかこの学校では珍しくないでしょ」

「私外部生だもん」

「そっか、高校からだ和理解しにくいかもねー」

「鈴はどうなの？」

「私？私は別に。好きならいいじゃん意見です」

「…ああ、そう」

「もしかして朝から暗いのは、そのことについて考えてた？」

「…だって」

「…だって？」

「い、嫌じゃなかったんだもん」

「……………あー」

「……………」

「…愛里乙」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8249x/>

乙女は白百合の箱庭に

2011年11月23日22時45分発行